

## 架蔵古活字本大和物語書き入れについて

山崎 正伸

架蔵の古活字本大和物語の本文について紹介した折に、その書誌について触れた。重複するが特殊な本だけに、改めて示すと、表紙が、縦二八糎、横一九・五糎の大輪花卉空押模様丹表紙で、縦一七・三糎、横三・三糎の「やまと物語上」と「やまと物語下」の印刷紙題簽が貼付されている。印刷面は、無辺無界で、縦二一・五糎、横一六・五糎、一面一二行、一行二二字程で字組がされている。上巻巻首に内題がなく、上巻末尾に「大和物語上終」とあり、下巻巻首に「大和物語下」、下巻末尾に「大和物語下終」とある。版心は上巻第一丁に「上」と「一」があるだけで、他の丁にはなにも無い。上巻五二丁、下巻四三丁の二冊本である。これに、石田某所蔵の古注と北村季吟の拾穂抄と賀茂真淵の直解が書き入れられ、楫取魚彦と田中道麿の注が書き込まれている。これに、二箇所の道麿の弟子で、書写者である渡辺直麿の書き入れが張紙である。貼紙は、上巻一丁表に、「一人々々ニアヒナバ一人くト重ね云ル凡テ物ヲ相對ヘテ云ル古言也只ヒトリニ也古今ニ思フドチ一人々々ガ恋死ナバ誰ニヨソヘテ藤衣著ムコレモ男ト女ト相對ヘテイツレニマレヒトリノコト也今ノ世ノ心ニ思ヘバ一人くハ一人毎ニト云カ如ク聞ユレドモ然ニ非ズ○源氏竹取ナドニモ一人々々ト云コトアリ皆同」(一四七段)と、二七丁表に、「コソノトマリナシ可尋ナリ」(七六段・和歌一〇九)とあり、ともに筆蹟からして直麿のものと推察される。表紙裏には、

○作者

一説在原滋春 時世イト異ニテ此人ノコトモ入タレハ不取

一説花山院

ソノ御時ノ書ザマ也サレド御作ト云コトイカゞアラン御在世マテ有ケン人ノ哥アリ凡ソ物語は昔ノ人ノ上ヲコソイヘトオボツカナシ此コロ近キ清輔朝臣ノ説ニモ作者不知ト有後ノ説ハオシハカリ也

○此文ニ先帝トハ延喜ヲ申 オホキオホイマウチ君ヲ貞信公トシ 今ノ左ノオトゝハ小野宮殿 コレニヨリテ天曆ノ頃

トイヘド條々異ニテ古今交レリソレニヨリテハ時代サシカタシ ○作者ノ哥ト見ユルモアリ 円融 花山 一条ノ始

比トミユ

○凡ソ此物語イセ物語ヨリモ詞多クテヨワシオカシキ古言モツタナキモ交レリ其中ニ始ト末トハヨリ書ナセシモ有中ラ

ハコトワリナク詞モツタナキ有イセ物語ヲカヘテ書シハイヨクワロシ

○ナラノ帝人丸ナトノコト書シハ時世モシラヌ人ノ云ルニヨレリ猶其トコロニ云

○古キ物語文ノ今有モテイハゞ○竹取古シト云ヘドコトノサマツタナシ○住吉今ノハ取ガタシ○伊勢コトノサマ古ヘニ

ヨリ詞厚クミヤビ也○源氏後ノ世ニツキテコトウスク心ヤリニスギタリ○オチクボ○ウツボ○大和イセ源氏ナドノ間

ナル物也

○大和物語ハ枕草子ニ古キ物語ブミノ名ノ末ニ在

以上は、賀茂真淵の『大和物語直解』の凡例のようである。この件については、「師曰」という注で後述するとして、続いて、

石曰親房卿ノ曆名抄ニ云親王ノコト官名ニアラズ規模ノ号也生レ玉ヒテ若子ノ時モ宣旨ヲ蒙リ玉フサテ元服シアザナ字付玉

フ也ソレヲ叙品ト云又元服ハカリシ玉ヒ後ニ叙品シ玉フモ例アリ元服ハシ玉ヒ叙品ナキヲ無品親王ト云也品ト云ハ親王

叙品ノ時后腹ウラハ三品御息所更衣腹ナトハ四品ニ叙シ玉フコトヲ本位ト云元服シ玉ハズ叙品シタマハサレバ中務式部卿彈

正尹太宰帥常陸上総上野ノ大守ナトノ親王ノ宮ニ任シ玉フ例レナシ無品親王ハミコノ官ニモ任ジ玉ハズタゝヨヒ玉フ也姓

ヲ玉ハリ玉へハ臣下ノ官ニ任シ玉フ也又無品親王姓ヲ玉ハラス更叙品シ玉フハ本位ノマヽ也元服叙品シ玉ヒテ親王ノ官ニ成玉フハ後一品二品ニ叙セリ又先凡人ニナリ後ニ親王ノ官ニナリ玉フモアル也延喜ノ親王兼明親王任左大臣後中務卿也父親王ニテ其子親王世々アリ父姓ヲ玉ハリ凡人ニナリ其子二世三世ノ源氏ニ親王ノ宣旨アルハマレ也親王ハ大臣ノ上ニオハシマス也礼義マツハ同シ但當今ノ親王上皇ノミコハオモシ二世三世ノ親王ハ大臣ニ同シ親王宣旨ナク姓ヲモ玉ハヌ諸王ハ叙位ノ後公卿ニカハリナシ位ニヨルナリ

と、一〇六段の「みこたち」の『大和物語鈔』（七四段）の注がある。加えて、書き入れの凡例が、

○石曰トアルハ江戸ニテ石田某ノ本ヲ師ノカリテソガ中ノ説ヲ記ス余ハ主ヲ首ニ書ツ ○眞ト有ハ加茂真淵（天理本①）  
○説者ヲシルサヌハ加茂真淵説」とある） ○魚ハ楯取魚彦 ○道ハ田中ノ道磨也 ○外ハ季吟ノ説多ク有ル也

とあるが、架蔵本に「眞」印なく、天理本にも架蔵本にも「師曰」とする『直解』と同じ記事がある。また、説者を記さないものの大半が真淵の『直解』であり、北村季吟の『大和物語抄』（拾穂抄）である。

「石曰」とする注を拾うと八六事例ある。これに、天理本による七事例を追加すると九三事例認められる。以下に掲示すると、

1 [3段] 石曰カタ帆ニカケシ舟也ト

2 [5段] 石曰穩子温子ノ妹也中宮ニ立玉フハ延長元年四月廿六日也前坊ウセ玉ヘル次ノ月也朱雀村上二代ノ国母

3 [6段] 石曰コノ哥新千載ニイト忍テカヨヒケル女ノ男受領ニナリテ下リケレハカノ女モマカリケルニツカハシケル謙  
徳公ト有

4 [8段] 石曰監命婦ハ藤原千兼女也千兼ハ宰監ナルユエシカ云

5 [8段] 石曰方フタカリハ中神也 四方ヲ各十二ニワリテ北十二分ニ分ル東ノ方ヨリ三ツ目ノ所ヨリ丑ノ分也巳酉日ヨリ天一神丑ノ方ニ下リ東へ廻リ四方ヲ四十四日ニ廻リ尽シテ癸巳日ヨリ戊申日ニ至リ十六日天上ニアリ是ヲ長

神トモ云リ 四方各十二日トイヘトモ角く二四日カケテ四十四日一日く廻り玉へハ一夜メクリノ神トイフ  
其マシマス方ニ行コトヲ忌也○又曰己酉ハ在良六日サテ東ニ五日巽ニ六日南ニ五日坤ニ六日西ニ五日乾ニ六  
日北ニ五日天上ニ二十六日云々

6 [9段] 石曰続後撰ニ兵部卿敦固親王ミマカリニケル秋九月晦日ハニアタリケルニカノアトニ申オクリケル俊子トアリ

7 [9段] 石曰宮ノオハシマサハコソ秋ノ初モ果モオモホエウセ玉ヒシカハ今日ヲ秋ノ果トハイハジカクレ玉ヒシ日コソ果ナレトイフ也

8 [10段] 石曰堤ハ京極堤也一条二条ノ堤ヲ云

9 [11段] 石曰清陰ハ陽成院ノ五男 忠房ハ大貳廣敏孫信濃掾奥副ノ子

10 [11段] (天理本・石曰) 亭子院ノワカ宮トハ云ヘトモ亭子院ノ御女ニアラス延喜ノ御女ニテ前斎院也

11 [13段] 石曰一条ノ君傳不詳後撰ニ伊勢カモトヘ鬼ノカタヲ書テヤルトテ恋シクハカケヲタニミテ云々トヨミシ人ナリ

12 [16段] 石曰コノ少将ハ小野ノ絃風也寛平二年任右少将 又曰スケノゴハ時平ノ子

13 [17段] 石曰出羽ノゴハ橘吉俊女 吉俊出家ノ後出羽ノコノ母ニ小野絃風カヨヒシ也ヨリテ継父ノ少将トイヒシナリ

14 [18段] 石曰二位御息所ハ昭宣公女穗子也 延喜ノ御息所中宮穩子ノ妹

15 [22段] 石曰拾遺物名小川ノ橋 築紫ヨリコゝマテクレトツトモナシ太刀ノ緒革ノハシノミソ有

16 [23段] 石曰後撰ニ宇多院ニ侍ケル人ニ消息ツカハシケルに御返コトモ侍サリケレハヨミ人シラス ウタノ野ハ耳ナシ  
山カ呼兒鳥ヨフコエニタニコタヘサルラン カヘシ 女五ノミコ 耳ナシノ山ナラストモヨフコ鳥ナニヲカキ  
カン時ナラヌ音ヲ

17 [23段] 石曰コノ哥続後撰ニ彈正尹元平親王ヒサシク通タエテ後立ヨリテ侍ケルニ逢侍ラサリケレハ歸リテ恨ツカハシ

ケル返コトニ藤原俊蔭女トアリ

18 [27段] (天理本・石曰) 戒勝ハ藤原敏行之子伊衡之弟

19 [29段] 石曰新勅撰ニ式部卿アツヨシノミコノ家二人ノマウテ来テアソヒナトシ侍リケルニ女郎花ヲカサシテヨミ侍ケル 三条右大臣トアリ

20 [30段] 石曰新千載恋四題不知

21 [32段] 石曰此哥続後撰ニハ亭子院ニ奉リケル 監ノ命婦ト有

22 [32段] (天理本・石曰) 司メシニモルヲ添

23 [35段] 石曰新六帖ニ衣笠内大臣 ハルカナル都ノイヌキワカイホハ大内山ノフモトナリケリ

24 [35段] (天理本・石曰) 新勅撰ニ此哥アリト

25 [42段] 石曰里ニモ山ニモ云サワガレンカタナキヲ雲ニタトフ

26 [42段] 石曰オヒケンハ生ケン也

27 [45段] 石曰十三ノ御子ハ延喜帝第十三皇子行明也 行明ノ御母ハ兼輔ノ女

28 [45段] 石曰後撰ニ太政大臣左大臣ニテスマヒノカヘリアルジ侍リケル日中将ニテマカリテコトヲハリテ是彼マカリアカリケルニヤンコトナキ人ニ三人ハカリトメテマラウトアルシ酒アマタタヒノ後醉ニノリテ子トモノ上ナト申ケルツイテニトアリ

29 [46段] 石曰桓武第六ノ御子仲野親王一好風一平仲

30 [46段] (天理本・石曰) 新千載ニ平貞文トテ入

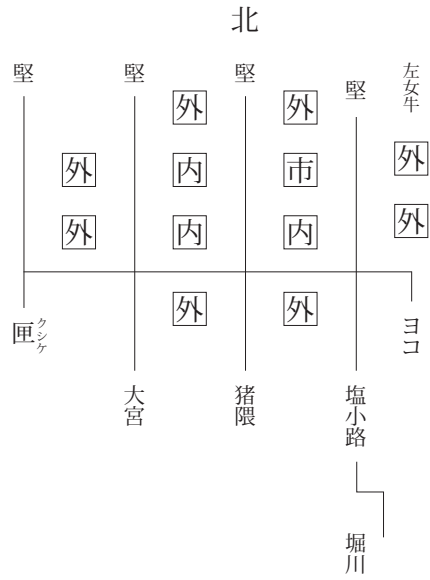
31 [48段] 石曰寛平ノ御女傾子ノ母女御衍子菅丞相女ト系圖ニ有 此人ノコトナルヘシ

32 [49段] 石曰続古今ニ尹子内親王賀茂齋院ニオハシマシケル時菊ノ花ニ付テ奉ラセ玉ヒケル亭子院御哥トアリ

- 33 [51段] 石曰コノ齋院ハ延喜ノ皇女 （ハヤハ） 詔子内親王延喜廿一年加茂ヲシリソキテ大納言清蔭室トナリ玉フ
- 34 [51段] 石曰秋ト飽ト兼
- 35 [51段] 石曰延喜帝ヘナゲキテ御子アマタノ中ニ齋院ニオキ玉ヘルハツラクオモホユルト也
- 36 [51段] 石曰延喜ノ
- 37 [51段] 石曰花ニオク霜モ霜ノ心ナラズ齋院ニ居玉フモ帝ノ御心ナラズト定ニヨリテノコトナレハ神ノ心也
- 38 [53段] 石曰後漢靈帝四代阿智王。来朝シ丹波ノ坂上ニ住居シ坂上ヲ氏トス  
坂上元祖犬養—苜田丸—(天理本田村丸—) 廣野—遠道 左衛門佐  
陸奥守 從五位下
- 39 [53段] 石曰誰トモナシ
- 40 [54段] 石曰名不知
- 41 [55段] 石曰誰トモナシ
- 42 [56段] 石曰古今集作者ノ兵衛ハ筑前守藤原高經女 後撰作者ノ兵衛ハ右衛門佐藤原兼茂女也 コノ哥後撰ニ思ヒワス  
レニケル人ノモトニマカリテ ヨミ人シラズ ユフヤミハ道モミエネドニ云
- 43 [56段] 石曰コノカヘシ哥モ後センニ入
- 44 [57段] 石曰仲興ハ内膳正忠望男也 昌泰元年藏人 延喜三年大内記 四年近江守後ニ左衛門権佐 桓武御子葛原ノ子  
高棟王—季長—中興—女子 哥人
- 45 [61段] 石曰宇多天皇オリ弁玉ヒ先朱雀院ヘワタラセ玉ヒ延喜十五年ニ亭子院ヘウツリ玉フ ソコニ御息所達ノ御曹子  
オホシトモ也 御曹子ハ局ヲ云 河原ノ院ハ左大臣融公ノ家也 六条坊門ノ南万里小路ノ東也 融ノ男昇大納  
言讓ヲ得テ寛平法皇ニ奉リ玉フ 前四町後八町也 号ニ東ノ六条院<sub>ト</sub> 六条京極也 爰ニウツリ玉フニ時平公ノ  
女モワタラセ玉フユエニ京極御息所ト云

- 46 [62段] 石曰ノウサンノ君隱名也 宇多女三君子内親王ノコト也
- 47 [62段] 石曰淨藏ハ元享尺書ニ諫議大夫殿中善宰相清行第八ノ子母ハ弘仁帝ノ孫女也七歳ニシテ求ニ出家ニ云云拾遺集ニ御導師トアリ
- 48 [65段] 石曰五郎ハ是忠ノ五男ニテ三河守源正明 正四位下大弼參議
- 49 [65段] 石曰承香殿御息所高藤ノ女胤子延喜ノ母后号ニ承香殿女御ト
- 50 [66段] 石曰後撰ニ入
- 51 [68段] 石曰贈答トモニ後撰ニ入
- 52 [70段] 石曰三川国宝飯郡篠束ト云所アリ
- 53 [74段] (天理本) 石曰後撰ニ前栽ニ紅梅ヲウエテ又年ヒラキケレハト有
- 54 [85段] 石曰桃園ハ世尊寺南一条大宮也
- 55 [85段] 石曰延喜帝一ニ品兵部卿代明親王一桃園宰相源保光
- 56 [88段] 石曰誰トモ不知
- 57 [91段] 石曰新勅撰ニ兵部卿元良親王ニ文ツカハシケルカヘシニヨミ侍リケルト有
- 58 [92段] 石曰ミクシケノ別当ハ典侍章<sup>アキラケイコ</sup>子
- 59 [93段] 石曰延喜皇女雅子内親王承平二年十二月廿五日卜定承平六年母ノ喪ニヨリ退ク後九条右相丞師輔室トナル高光少将ノ母也
- 60 [103段] 石曰東京市市屋一町内町三町外町八町凡テ十二町也左女牛南四町油小路西四町也市屋ハ内町ノ東北ノ一町七条坊門ノ南堀川ノ西也 西京市七十二町也市屋内町ノ西北ノ一町也内町外町如東京 上ハ左女牛下ハ塩小路西匣ヨリ西野寺町ヨリ東圖形如東京市町京市司西市司守之云云職原抄ニミユ

京ヨコトホリ 七条坊門 (天理) 北小路七条



61 [103段] 石曰當時武(○藏カ/天理本藏ナシ) 守藤原經邦ト云人アリ

62 [105段] 石曰平中興前ニ在人ノ国ニハカナキトコロニスミケルヲ兼盛ガ哥ニ返コトセサリシ女也

63 [106段] 石曰敦固親王也

64 [106段] 石曰中興カ女

65 [108段] (天理本・石曰) イマ君ハ後撰ニハ閑院ノゴトアリ

66 [108段] 石曰オホキオトノ内侍ノカンノ君ハ貞信公ノ女貴子ナリ始文彦太子ノ宮ニ入玉ヒ太子カクレ玉ヒテ後天慶元年尚侍也ソレニイマ君ハサフラヒシナリ

67 [109段] 石曰後セン二人ノ牛ヲカリテ侍ケルニシニケレハ云ツカハシケル閑院ノミコト有

68 [111段] 石曰一条ノ北東洞院西ノ角

69 [114段] 石曰此哥新古今ニ入ルト



70 [118段] 石曰宗于ノ女前ニ巨城カ牛ヲカリシ女南院ノ今君ト云リ 後撰ニ吾ノリシノ哥閑院ノ子カ作也南院ヲ号ニ閑院ト  
オホイ君ハ今君カ姉也

71 [119段] 石曰閑院ノオホイ君宗于ノ女

72 [119段] 石曰藤原サネキハ右大臣是公ノ後胤彈正忠保生ノ子也

73 [121段] 石曰少貳眞任系圖不慥

74 [122段] 石曰新統古今ニ入ト

75 [124段] 石曰キタノカタハ從五位在原棟梁ノ女 權中納言敦忠ノ母也

大納言右大将

76 [125段] 石曰高藤 定国

定方

三条右大臣

77 [126段] 石曰後撰ノハ大貳モコト異也詞書ト上句ヲカヘテ作り物語ニ書ル也

78 [131段] 石曰延喜帝也

79 [137段] 石曰トシコハ延長ノコロサカリナル人 サテ親王ハ天曆三年誕生御出家ハ三十三円融院ノ比 トシコ甚老年ナ

ルヘシ

80 [137段] 石曰新勅撰前書ニ兵部卿元良の親王シガノ山越ノ方ニ時々通ヒ住侍リケル家ヲ見ニマカリテ書付侍ケルト

シコト有

81 [138段] 石曰コノ贈答新千載ニ女ニツカハシケル枇杷左大臣カヘシ伊勢トテ入タリココハ詞書ヲ添テノスルニヤ

82 [139段] 石曰延喜帝

83 [140段] 石曰貞子

84 [144段] 石曰二ノ匂甲斐ヲ立入テヨメル

85 [148段] 此書留タルニ返哥ハ後人ノ拾遺ニヨリカキ加ヘシモノカ(天理本・石曰イカゞ成ケンシラズト書トメタルニコノ返哥ハ後人拾遺ニヨリカキクシヘシナラムト)

86 [155段] 石曰誰ト不知

87 [159段] 石曰染殿ノ内侍ハ典侍藤原因香朝臣也寛平九年從四位下母ハ尼敬信ト又曰因香ハ高藤ノ女也

88 [159段] 石曰能有ハ文徳第三ノ御子右大臣左大將

89 [160段] 石曰後撰ニ女ノモトヨリイヒオコセテ侍ケルヨミ人不知アキハギヲ云云カヘシ在原業平朝臣アキハキヲイロトル風ハ吹ヌトモ云々

90 [165段] 石曰三代実録二元慶四年五月廿八日從四位上兵衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒ス五十六歳

91 [168段] 石曰五條ノ后ハ左大臣冬嗣公女順子也

92 [170段] 石曰兵衛命婦筑前守藤原高經女古今作者也後撰ニ入タル兵衛ハ藤原兼茂女也拾遺ノ兵衛内侍ハ信濃守源隆俊女也ト

93 [170段] 石曰命婦ハ中臈也職員令ニ婦人帶五位以上為内命婦五位以上ノ妻曰外命婦云云

となる。1の「石曰カタ帆ニカケシ舟也ト」だが、高橋正治蔵本には、「かたかけの舟にやのれるの哥 汀の舟也白浪にさはかれ出るをたとへてさはくときのみ思ひ出る君と也下照姫の哥にいしかはかたふちかたふちにあみはりわたしとあり

かたかけはかたふち也此方のさまを相聞互集三ノ哥と云云恋スル相聞ト云也といふとなり」とあつて、異なる。しかし黒川本は、「哥の心ハ片帆かけて行

舟也片帆かけて行舟の時ハすむ 又の義恋ノ事瀉陰也マメ 其時ハ濁る也 瀉陰ハ塩の深く浪の立處也 古六帖 汐瀨漕タナ かたかけナシ 小舟なかほともいたくな侘そ梶とり行かん 此哥にて思合すれば片かけは片帆にかけたる舟也也なるへし 然はけの字清て

可然也<sup>③</sup>とあつて、同一となる。以下、高橋本・内閣文庫本・加茂季鷹文庫本<sup>④</sup>・日大本と<sup>⑤</sup>、5・7・8・10・11・13・14・16・18・22・25・26・34・35・37・39・40・41・42・45・51・54・56・58・61・63・65・66・68・70・71・75・77・78・79・82・84・86・90・91・92・93の事例は一致する。2の事例は、傍線部が黒川本にあつて、その他は無い。同様に、一部が黒川本に付加された部分と一致する事例は、4・9・12・15・33・44・46・48・52・59・62・87の一二事例、また、黒川本の上に記された他文献と一致する事例は、3・6・17・19・20・21・23・24・28・30・32・43・50・53・57・67・69・74・80・81・85・89の二三事例、黒川本にのみ一致するのは、27・31・36・38・49・53・55・60・64・72・73・76・83・88・89の一五事例である。以上の結果から、石田某所蔵の大和物語は、『大和物語鈔』であり、それも実践女子大学蔵黒川本に酷似している。一・二事例を例示すると、27の「第十三皇子行明也」は、高橋本・古典文庫本・日大本などは「延喜第十三量明親王」とする。黒川本は、「十三ノ御子ハ延喜皇子十三男行明親王ナリ 兼輔ハ(女ハ)行明ノ母公也依之十三ノ御子ノ母ト書タリ 書本ノ大系ヲ勘二十三ノ御子ハ行明ト有 判大系圖ニハ十三ノ御子ハ廣平親王ト有テ母ハ元方女トアリ 或行明ハ十一ノ御子ト云々 又判ノ抄ニハ章明親王ト有 母ハ桑子兼輔女ト有 又判系圖ニハ章明ハ十二ノ御子也 行明ノ母ハ時平女褒子ト有」として、行明親王を上げる。31も、高橋本「刑部の君 菅家の御女也」とあるだけだが、黒川本は、「寛平ノ御女傾子ノ母女御衍子 菅丞相女ト系圖ニアリ 此人ノコトナルヘシ」とある。53の事例だが、黒川本と一致する。60の「職原抄ニミユ」というのは、高橋本は「以上京職の圖にみえたり」とあり、諸本「京職」という本とするが、黒川本は「職原二見ヘタリ」とする。もとより図は職原抄にはなく、黒川本と同様で、石田某所持本の注釈は、黒川本と同系統のものとして良いであろう。「石曰」と記さないもので、『大和物語鈔』と関係があると認められる書き入れは、

- 1 「10段」古ニ飛鳥川測ニモアラヌ我宿毛瀬ニカハリ行モノニソ有リケル (天理本・伊勢) 新二住ワヒテ吾サヘ軒ノ忍草忍フカタクオホキ宿カナ 周坊内侍

2 「35段」新勅撰ニ此哥アリト

- 3 [87段] 遠ザカル意也
- 4 [89段] 拾遺詞書ニ藏人所ニ侍ケル人ノヒヲノ使ニマカリケルトテ京ニ侍ナカラオトモシ侍ラサリケレハイカデ猶アシ  
口ノ……
- 5 [89段] 拾遺ニ此カヘシナシ
- 6 [89段] 後朝ノ哥也
- 7 [92段] 後セン冬ノ終ニ入撰詞書ニミクシケトノ、別当二年ヲヘテ云わたり侍ケルヲえあハすして其年のしはすにつこ  
もりの日つかハしける藤原敦忠朝臣もの思ふト云云
- 8 [92段] 後セン詞シノヒテミクシケトノ、ヘタウニアヒカタラフトキキテ父ノ左大臣ノセイシ侍ケレハ敦忠朝臣
- 9 [92段] 後撰恋四詞書ミクシケ殿ニハシメテツカハシケル敦忠朝臣
- 10 [93段] 後撰詞書 西四条ノ前齋宮マタミコニモノシ玉ヒシトキ心サシ有テ思フコト侍ケル間ニ齋宮ニ定リ玉ヒケレハ  
ソノアクルアシタサカキノ枝ニツケテサシオカセケル敦忠朝臣
- 11 [96段] 式部卿通ひ給はずなりし也ノ式部卿宮おはしまさすなりたると也 (黒川本・塗消)
- 12 [125段] 不意<sup>ユリナク</sup> 紀 (鈔・不意也 黒川本・不意<sup>ゆくり</sup>)
- 13 [139段] 拾遺詞 延喜御時承香殿女御ノ方ナリケル女二元良ノミコマカリカヨヒ侍ケル タエテ後云ツカハシケル 承  
香殿中納言
- 14 [139段] 後撰詞 ワスレカタニナリ侍リケル男ニツカハシケル 承香殿中納言
- 15 [140段] 昇ハ融公ノ男
- 16 [144段] ヲフサヲカクシテヨメリ
- 17 [144段] 古今詞書 カヒノ国ニアヒシリテ侍ケル人トムラハントテマカリケル道中ニテ俄ニ病ヲシテ今くト成テケレ

ハヨミテ京ニモテマカリテ母ニ見セヨト云テ人ニツケ侍ケル哥 在原滋春

18 [145段] 新古今躬恒アハヂニテアハトハルカニ見シ月ノ近キコヨヒハトコロカラカモ

19 [145段] 古今詞書 源ノサネキガツクシヘユアマシニトテマカリケルトキニ山サキニテワカレヲシミケル所ニテヨメル シロメ イノチダニ……

20 [148段] 伊物ノ詞

21 [148段] 益ナキ也 イセ物又末ツム

22 [163段] 古今人ノセンサイニ菊ウエケルニムスビツケテト有

23 [171段] ヤマト父ハシラズ 後撰に アツヨシノミコノ家ニヤマトト云人ニツカハシケル 左大臣 今サラニ思ヒ出シトシノブルヲ恋シキニコソワスレワビヌレ

の二三事例。このうち黒川本だけに見られるものは、2・3・6・8・9・10・13・14・18・21の一〇事例で、1のように傍線を付した付加部分が一致するような、親密な関係を持つている。黒川本との関係で、一・二指摘すると、3の「遠ザカル意也」であるが、黒川本でも朱筆で「遠クナルラン也」と記されたもので、他には無いものである。また、11の注であるが、高橋本に拠ると「九君侍従の君にあひ給ふ比御息所に式部卿宮おはしまさす成たると也」とあり、黒川本は、「九君侍従の君にあひ給ふ比御息所に式部卿宮おはしまさす成たると也」が胡粉で塗消されている。架蔵古活字本の元となる田中道麿による抜き書きか、その前の抜き書きが部分的であったためか、確認までには至らないが、概ね、黒川本と石田某所持本が同一のものと見て良いであろう。このような推測が正しければ、黒川本は、架蔵本「石曰トアルハ江戸ニテ石田某ノ本ヲ師ノカリテソガ中ノ説ヲ記ス」の元となった天理本「石曰トアルハ江戸ニテ石田氏某ノ本ヲカリテソガ中ノ説ヲ記ス」によつて、田中道麿が石田氏某から借りた「五年丙申正月十四日於茅生庵校合道麻呂」（天理本）とある安永五年（一七七六）に存在していたことになるのではないだろうか。

楯取魚彦と田中道磨との大和物語会読で、付けられた魚彦の注は、

1 [103段] 魚曰大カタト云コト土佐日記源氏ナトモ大カタナラヌト云ニ大カタトノミ云ルコノ比ノ俗ナルヘシコヽモ大カタナラスハオボシソトナクサムルナランカフカクオホシソト云ホトノコト

2 [148段] 追考 万十七ノ七丁玉ハヤスムコノワタリニ天ツタフ日ノクレユクハ家ヲシソ思フト有コノワタリアタリノ意ナランヲモノノ字入タリ渡リニハアラジ佐野ノワタリトモ云リ

3 [151段] (コレモ亦作リコト也) 哥ハ古今ニヨミ人不知ト云哥ヲトリタリ皆人丸ノ時代モシラヌヲコノ人ノワザゾ注ニ人丸ノ哥ト云モコヽヨリ書シ物也(直解) 魚彦曰ソノ注古本ニハナシ

4 [152段] (魚曰) 陸奥ニ此郡ナシ是モ作リコト也(天理本「魚曰」とある)

5 [157段] アカラメ魚曰統紀三十六六廿 能登内親王薨時詔之中ニ今日加 有牟 明日加 有牟 所食念都々 待比 賜問尔 安加良米佐須加事久 於与豆礼加 云云(天理本) 師解六卅三詳

6 [162段] 魚曰伊勢物ニハアルヤムコトナキ人ノ御ツホネヨリワスレクサヲ忍ブクサトヤ云トテイダサセ玉ヘリケレハ玉ハリテト有カクテコソ哥モトカレメ

7 [166段] (魚彦曰) 古今ニハムカヒニタテリケル車ノ下スダレヨリ女ノ顔ノホノカニ見エケレハト有伊物ノ詞モ同意也カクテコソ哥ニ宜シケレ(天理本「魚彦曰」とある)

8 [169段] (古活字本「女共あるいふやう」)(魚曰) アナルノ方ハ下ノガ落タリ(天理本「魚曰」とある)

9 [170段] 魚曰此詞(かくてひさしうまいりたまはざりけるころ) コヽニイカヅトヒ玉ハザリケルナド云ヘシ

と九事例認められる。1のように、語意味の解説に触れるのは、嘉永六年(一八五三)刊行の井上文雄の『冠註大和物語』を待たねばならない。『古言梯』の奥付に「明和のはじめのとしの八月にあつめ終ぬ 下つ總の國なる楯取魚彦」と記す魚彦だけに、1・2・5事例と語彙に注目したのであろうか、両事例の語については、『古言梯』にはない。4の磐手郡につ

いては、『倭名類聚鈔』には「岩城〈伊波岐〉・「磐井」〈伊波井〉はあるが、「磐手」は見られない<sup>6)</sup>。『角川日本地名大辞典』によると、

岩手郡のはつきりした形での初見は「吾妻鏡」文治5年9月23日条である。この時、平泉を征定した源頼朝を案内した平泉の故実家が、藤原氏の支配のおこりが「奥六郡」にあったことを説明したとあり、その6郡とは、伊沢・和賀・江刺・稗抜・志和・岩手の6郡だとしている。(中略)平安後期、11世紀末頃までには成立していたはずの「陸奥話記」には、「六箇郡の司に安倍頼良なる者あり」とあり、この「六箇郡」が「奥六郡」に当たることは、「後三年記」に明瞭であるので、11世紀半ば、安倍氏が前九年の役をおこす時までには岩手郡の存在したことは確実である。ところで、安倍氏のその支配権は、祖父忠頼のころからのものだったとされているから、奥六郡すなわち岩手郡の存在も10世紀末〜11世紀初頃までさかのぼるといってよい<sup>7)</sup>。

とあり、『大日本史料』建武元年(一二三四)九・二七の条には「国衙新田孫五郎二令シテ岩手郡仁王卿ノ地ヲ後藤基泰ニ付セシム<sup>8)</sup>」(九一五頁)とあるが、『延喜式』にも見られず、「磐城郡」・「磐瀬郡」は『続日本紀』にも見られるが、「磐手」は、『大和物語』一五二段のみの事例で、魚彦の「是モ作りコト也」は、『俊頼髓脳』や『袖中抄』にある「野守の鏡<sup>9)</sup>」なども意識したものであろうか。5は、『続日本紀』天応元年(七八二)二月十七日の条を指摘する。『大和物語』では、「女から情が離れることなく添い遂げた」というのであり、指摘事例は、能登内親王薨去にあたって「不意に見えない所に行ってしまう」というので、意味的には異なるが、語彙として事例をあげたものか。6は、木崎雅興が安永五年(一七七六)起稿の『大和物語虚静抄』で『伊勢物語』を指摘し、文政二年(一八一九)成立の前田夏蔭『大和物語錦繡抄』が、文政元年(一八一八)刊行の藤井高尚『伊勢物語新釋』を引いて説明する。夏蔭の説より先に「カクテコソ哥モトカレメ」とする魚彦が正しく、『大和物語』は蛇足の誤解解釈である。7も同様に『大和物語』が本来とは異なる形へと変化したものである。

田中道麿の注は、

- 1 [1段] 道磨曰後撰二亭子院ノミカトオリキ玉フケル年ノ秋弘マ微殿ノカベニ書付ケル伊セ ワカルレド…… ミカド御覽シテ御カヘシ 身ヒトツ……
- 2 [4段] 道曰後撰集詞書ニ小野ノヨシフルノ朝臣西ノ国ノウテノ使ニマカリテ二年ト云トシ四位ニハ必マカリナルヘカリケルヲサモアラスナリニケレハカヽルコトノ安カラヌヨシヲウレヘオクリテ侍リケルフミノ返リコトノウラニ書付ツカハシケル 源公忠朝臣
- 3 [8段] 道曰コノ哥ノサガハ性ノ義 宮ノオトツレ玉ハズトモ何ゾウラミンワガサガコソツラケレトモ也
- 4 [14段] 道曰此ノ本ノ下卷廿丁ウ昔ナラノミカトニツカフマツル采女アリケリ云云ノ段ヲ見テ此ヲ解ベシ
- 5 [19段] 道曰恋モセヌ身トハ人ニワスラレシヲ恨ツヽウラヨリ云也
- 6 [21段] 道曰コハ続古ニ誤テ遍昭トセシ也 万四廿六才黒カミニ白カミマジリオユルマテカヽル恋ニハイマタアハナクニ万四ノ四十五丁恋ハ今ハアラシト吾ハ思シヤイツコノ恋ソツカミカカレル
- 7 [21段] 道曰良少將ヲ義方也ト季吟モ契沖モ云リ石説ハ続古今ニヨリテ宗貞也トシテ季吟ヲヤブレリ道丸思フニ吾ハ契沖ニ従ハン其ユエハ此コタヘ哥宗貞ノ口ツキト思ハレネバ也 (天理本に有)
- 8 [24段] 道曰卒句声キカセケントカオトキコエケントカアラマホシ (天理本に有)
- 9 [36段] 道曰竹ノ宮ト云ハ多氣郡ト云ヨリノ名
- 10 [40段] 道曰後撰詞書 カツラノミコノホタルヲトラヘテト云侍リケレハワラハノカサミノ袖ニツヽミテヨミ人不知ツヽメトモ……………
- 11 [49段] 道曰或人云齋院ハ弘仁元年ニ嵯峨天皇御女有智内親王ヨリ始ルサテソノツギヽヲ記シタル物ニ尹子ト云不見也齋院第十世ニアタリテ君子内親王ハ宇多ノ御女ニテ寛平五年ト定ト有尹ハ君ノ誤カ君ハ尹ノ誤カ可考
- 12 [58段] 道曰ウシロメタキハ心モトナキ也ソノ娘ノサカリスギンコトヲソヘテヨメリ



13 [87段] 道曰キエヌベシト云ン如ク心ギエスル也

14 [103段] 道曰女カリト云テタリナント

15 [105段] 道曰後撰恋四浄蔵クラマノ山ヘナンイルト云リケレハ平中興カムスメ

16 [121段] 道曰サネタウ未考サレト人ノ名トキコユレバ假字ハサネタフカ

17 [142段] (道曰) 堪忍ビテ返事モセヌヲ云(天理本「道曰」とある)

18 [144段] 道曰タエテハタヘテナルヘシ

19 [149段] 道曰(ありし女のがりの「の」) 衍ナラン

20 [162段] 道曰シノブ草ハ本草ニ金星草トアル草ヲ云也葉ノ表ニ金色ノ星アリト

の二〇事例が見られる。他出文献に関わるものは、1・2・6・10・15の五事例、10は、参考歌として万葉歌を上げている。7の「石説ハ続古今ニヨリテ宗貞也トシテ季吟ヲヤブレリ」とあるのも、高橋本にはなく、黒川本にのみ見られる。また、11の「尹子云々」も、黒川本のみが、「續古今前書に尹子内親王賀茂ノ齋院におハしましける時菊の花に付て奉らせ給ひける亭子院御哥ト有」「續古今ヲ勘ルニ此齋院ハ惟彦ノ御女ナルヘシ」尹子ハ惟彦ノ御女ナルヘシト有 齋院ノ姫ハ嵯峨ノ皇女有智内親王也」とある。3「コノ哥ノサガハ性ノ義」は、『直解』によるもの。「ワガサガコソツラケレトモ也」は、誤りである。4は、おおつふねの歌を一五〇段の采女入水によつて理解すべきと指摘したもの。5は、下の句「すすろにもののかなしきやなぞ」の解釈、恨みながらも恋する思いを指摘した。8の「卒句」は漢籍で用いられる「卒章」による言い方か、道麿は二箇所に用いている。第五句「声もをしまぬ」に対する注であろうが、醍醐帝がおいでにならない時の女御能子が我が身を郭公としての詠歌であるので誤りだろう。9は「たけの宮」の説明。12は、平兼盛の「花ざかりすぎもやするとかはづなく井出の歎冬うしろめたしも」の第五句の解釈を記したもので、『虚静抄』が、「今さるべかせらん折になど親のいひのぶるによりてとやかくいふ程には女のさかりも過なんかとうしろめたく心もとなしと思ふ心を歎冬にそへてよめる

也」というのと同じで、注としては早くからの指摘であった。13も高橋残夢の『管窺抄』が「この降雪には道のうへのみにはあられてかよふ心さへも絶えはてなむかかく互に心ほそければとなり」とする以前に道麿が指摘していた。14の「女カリト云テタリナン」というのは、19の「衍ナラン」と同様の指摘であるが、諸本「女のがり」とある。万葉一五五〇「妹がり」や、『伊勢物語』三八段「紀の有常がり」に拠った理解を示したものであるが、『大和物語』では、「この女のがり」(一〇三段)・「今の妻のがり」(一五七段・一六七段)と、連体修飾語をつくる格助詞の「の」が付いている。16は道麿所持の古活字本文が「さねたう」というのによるもの。17は「思へども」の和歌の第三句「しのぶれば」の注。「堪え忍んで返事もしなかつた」とする解釈。18は、道麿所持の古活字本文が「たえて」とあるのに対するもので、『管窺抄』が「たえてと流布本にもあれとはたへてなりたへは堪の意にての字濁るへしこらへかたき義也たえては絶にて秋より外は絶てなき意也といふになれりさる調はなし歌情明らか也」までこの指摘はない。20は、宝永六年(一七〇九)板行の『大和本草』を引用する。

前述したが、架蔵本扉に「眞ト有ハ加茂真洩」とあり、天理本には、「○説者ヲシルサヌハ加茂真洩説」とあるが、架蔵本には「眞」と記すものはなく、天理本には「師説」としたものが、以下の五事例である。

1 [89段] (師説) シタフ心ヲハ君ノ方ニト、メオキテ来シニ猶物思フコトノミ吾方ニノコリテアルヨシ也

2 [147段] (師説) 和名抄ニ撰津国菟原郡ヲ宇波良トアリ然ルニ万葉九右ノ下ニ今一首此哥有ニ菟原處女墓長哥ト書テ哥ニ葦屋之菟名<sup>ウツナヒメ</sup>處女ソノ反哥ニモアシノヤノ宇奈比處女トモ書ソノ長哥ニ智奴壯士宇奈比壯士トモ亦下ニ菟原壯士トモ書タリ然レバ菟原ト書テウナヒト訓シ也ケリ 和名抄ノ比ニ至テハ字ニツキテウハラト唱へ誤レルナルヘシ

3 [149段] (師云) 此卷ナドハスベテ作りサマツタナク詞モワロシモシハ始ノ卷ナト末ニモヨキ所モ有ヲ中へ好事ノイロく書加ヘシ物力在中將ノコト書ル条ドモハ殊ニワロシ古今ト伊勢(天理本伊物)トヲ見クラベテ知レ

4 [162段] (師云) ワスレクサ萱草ナルコト万葉ニテ明ラケク枕草子ニモ六月花サクヨシ有。シノフ草ハ和名抄ニ垣衣トテ

苔ノ類也別ナルコト明ケシ此物語書シ人誤レル也後人サマクイヘト皆古キコトシラテ此物語ナトニヨレルハ云ニモタラヌワサ也

5 [165段] (師云) コレ業平ノ哥ナランヤ作り物語ニアルヘシ (天理本ナルヘシ) 中ニモツタナクコソ

以上の五事例は、賀茂真淵『大和物語直解』<sup>⑩</sup>と照らし合わせると、1は、片仮名と平仮名、漢字仮名の違いのみで一致する(四五二頁)。2は「此事よめる歌万葉集卷九卷十九にもあり」とあって、傍線部が「菟原と書てもうなびとよみしを、和名抄の比に至りては、只字につきてうばらととなへしにやとも覚ゆ」(四九二頁)と、表現の違いが見られる。3は、「此わたりよりしばしか間、作りざまいとわろし、在中將の事どもかけるは皆わろし、古今と伊勢物語とを見ても知へし、又これより末にもよき所あるをおもへは、好事の者の、中の程へいろく書くはへしにやあらん」(五〇〇頁頭注)と、表現の違いが見られるものの、内容には違いがない。4は、傍線部の表現が、「しのふ草は、倭名抄に垣衣とて昔の類に出して明らか

に別なるを、此物語かく人の誤れる也、是より後の人」(五二四頁)と同じく、表現の違いのみである。5も、「かくつたなきが業平の歌ならんや、作りごとしるべし」と、表現に違いがあるのみである。架蔵本の書写者は、道麿の弟子の直麿である。それゆえ、凡例では道麿所持本の「師」を「真」とし、道麿を「師」として区別した。にもかかわらず、「真」とせずに、そのままにしたのは、天理本の凡例に、「説者ヲシルサヌハ賀茂真淵説」とあることで、同じ真淵の注と理解したからであろうか。そうになると、道麿が、「説者ヲシルサヌハ賀茂真淵説」としながらも、上記五事例にだけ「師説・師云」と区別したのはどのような理由だったのであろうか。『直解』の注の書き込みは多いので、長文を書き込んでいる一五〇段と一五四段の注を示すと、

此条ハ殊ニ後人ノ作りコト也サテ是ハナラノミカトト有テ人麻呂ノ哥ハ誤レリナラノミカドトハ平城天皇ヲ申也人丸ハ藤原宮慶雲中ニ石見ニテ死テイト古ヘナルヲ此比イト誤テ書シ物ニモアラズ物語ニハ偽リ作レル也然ルヲ諸説ハ古ヘノ

コトヲモシラデ強テ偽ヲカサラントスル故ニ皆笑フニ堪ヌコトヲ注セリサテ行ツマリテハ傳受ナド云コトヲ云テ人マトハセリ古今序ニモ今ノ本ニハ後人偽テ語ヲ加ヘシコト多シソハ古今ニテ云天皇ノ御謚天命ト申ハイト多キヲ天命開別天皇ヲノミ云ハ誤也ナラノ宮ト云時ハ大和国ノ奈良都ノコトニテ元明ヨリ光仁マテ御七代也ナラノミカドト申ストキハ平城天皇御一代ノ御名也又文武ハ藤原美弥ナルヲイカデナラリミカドト云ニカク云説ハ皆カノ古今序ニ俗ノ加筆アルヲ見ワカデ強云ノミ○次下ニナラノミカト位ニオハシマシケルトキサガノミカドハ云云ト書ツケシニテ知ヘシソレヲモイロク云マギラハシタル説明ハワラフニ不堪スヘテ或抄ハ古書ヲ見ワカタヌ説ノミ也○万葉ニ二柿本人麿石見ニテ死シシハ文武ノ慶雲二年ノ間也月日ハシラレヌヲ三月十八日ナド云ハ強ゴト也続紀ニ柿本人麿ハ不出。他性(マヤ)(天理本・姓)二人丸ト云人此紀ニ多キヲ誤テ云也墓ソノ外ノコト或抄ニ云ルモアトカタナキ偽言也此哥ヲ拾遺二人万呂トテ入タルモ此同じ比ノ流言ノミ必マコトニアラズ

とあって、『大和物語直解』(五〇三頁)に傍線部を除いて一致する。また、表紙裏の書き込みも、宝暦一〇年に賀茂真淵が記した(四〇五〜四〇七頁)ものの要約である。

『大和物語直解』については、阿部俊子氏が、『賀茂真淵全集』の「大和物語直解説」で、

「大和物語直解」は賀茂真淵が手がけた「大和物語」の注釈書である。一、成立 序文に「宝暦十年の冬、人々つどひてよみける時に、賀茂真淵しるす」とあり、終りに「宝暦十年七月よりたま〜あつまりてひとわたりよみて、おなじ十二月の八日によみはてつ、一月に三度よたびなんよみける也、もとの注のあしきをは多くけしつ、そのむしろにさまざまのよしなしごとをもいひわたらひながら、たま〜かきつけたれば、それはたわろきこともおほかりなん」と跋文を記している。更に、源躬弦の記している凡例に「この物語の注、世におこなはれたるは、ふやうなる事もひがめるもいとおほくなんありける、さるを県居の大人つばらかに考正してもとの注をけち、あるはかきくはへなどし給へりしを……」とあることなど考え合わせると、真淵が一人で検討を加え考察したことを記述したものではないことと、旧注

についてこれを中心に検討改訂を試みたものであると知ることができる。宝暦十年は西暦一七六〇年、一一六代桃園天皇の代、幕府では九月に徳川家重から十代家治に將軍職が移った年で、真淵は六十四歳。彼はすでに、万葉集新採百首解、冠辞考、源氏物語新釈等をあらわしており、同じ宝暦十年には七月に万葉考を書いている。このあと十一月田安家の職を退き、歌意考、国意考、神遊考、祝詞考等次々に仕事をまとめ、九年後の明和六年（一七六九年）に七十三歳で歿している<sup>11</sup>。

と、真淵の稿本が宝暦十年一二月に完成し、

真淵の稿本は、写本のまま、村田春海が所持していた。これを源躬弦が、寛政五年（西暦一七九三年、一一九代光格天皇、十一代將軍家齊）九月に書写し終っている。この本も写本のものであつたが、清水浜臣は出版を考えたらしく、自ら全部書写し、本文にも、首書、慶安刊本、類従本等によつて校合を加え、注釈も補足充実し、自説をも加え、版下にしようとしたらしい。

と、村田春海が所持し、それを源躬弦が書写したのが寛政五年であるという。阿部氏の解説から、『直解』の書写やそれに関連する記事を抜きだすと、

寛政五年（一七九三）「寛政五年九月源躬弦しるす」

享和二年（一八〇二）「享和二年壬戌正月望日卒業 長滄」

文化九年（一八一二）「文化九年十月上旬、会岡田直澄、木村定良、前田垂穂光幸、参中村光房、于敝廬対読卒業」

文政七年（一八二四）「文政甲申八月借得泊泊舎儲藏本而手自写之与中村光房対読了 岡本保孝識」

文政九年（一八二六）「丙戌春三月与粕屋重浪対読夏四月卒業」

安政二年（一八五五）「二月上旬細君対読了」

となる。天理本と架蔵本の書き入れは、

安永四年（一七七五）「安永四歳次乙未六月四日以縣居本校合畢 魚彦」

安永五年（一七七六）「五年丙申正月十四日於茅生庵校合畢 道麻呂」

安永十年（天明元年・一七八一）「安永十歳辛巳弥生下旬」渡辺直磨大和物語校合

ということ、魚彦が宝暦十年（一七六〇）の大和物語会読に参加していたかは不明だが、「楯取魚彦年譜稿」によると、魚彦の県居入門は宝暦九年（一七五九）一月、宝暦十年一〇月には、真淵が『万葉考』巻一・二および別記を脱稿し、魚彦と藤原維寧が『万葉集別記』の校正に従事したという。<sup>12</sup> 中西慶爾氏によると、

田中道麻呂は二度ほど江戸に下っているが、その歌集『垣根の落葉』によると、安永二年（一七七三）二月に江戸に下り、数日滞在しているが、その或る日に、初めて楯取魚彦に会ったらしい。<sup>13</sup>

とされるが、林義雄氏は、『万葉集問答』の「諸卷問件」の中にある質問の条によって、

○去年七月、道丸初テ参上仕レル時、事にふれて物語り仕りし四十七言の歌の事、<sup>安永六</sup>

スミノエナルタキニサヲトメワセウエヌ イネカリテヨオチホヒロヘコラソユシモムギマケアハフツクレヤ

此歌、八九年以前に作りて、六年以前に初て魚彦に見せ、其後四年以前にウマキに見せ、去年先生に申たる外に、さのみ外へ見せざりしは、誤りあらん事を恐れて也、魚彦ウマキもほめられたるに、（以下省略）

右の記事にいう「六年以前」は、試みに安永七年十二月を起点として計算すれば、安永元年十二月以前を指すことになり、二人の交際が、すでに安永改元以前の明和のころから書簡を通じて始まっていたことを示すかのごとくも見える。

（中略）したがって、兩人の対面がこの時期にあったか否かは決し難いものの、二人がすでに安永元年前後のころに己の間柄にあったことは、これによって確定されるのである。<sup>14</sup>

とされる。魚彦が宝暦十年（一七六〇）には既に真淵の門に入っていたのである。真淵の注を写す機会があったものとは考えられよう。道磨は、石田氏某所持の『大和物語鈔』と、魚彦所持の真淵の注を写す機会が得られたのである。

さて、架蔵本は渡辺直磨からどのような経路を辿ったかは不明であるが、天理本には、

此本は道磨没後 遺本ともみな其弟子達次々伝はりつるが 吾醫術の学兄なる堀川主より 今は榛木翁の門人なし

おのれに取れとあるに従へり おのれより又つぎはと尋ね侍るに そはおのが心にまかせよといはれ侍りき

今年嘉永二年迄て蔵本首書にもいひつる<sup>コト</sup>く書入れ 又この本にもいさゝかつゞいはまほしき<sup>コト</sup>この赭筆にてかきたりかれまがひはあらし

二月廿三日 鈴屋門平野廣臣 六十六

と、田中道磨亡き後、道磨の遺本は弟子達に伝わった。堀川稲置については、『国書人名辞典』によると、「医者・国学者  
〔生没〕 宝暦十年（一七六〇）生、没年未詳。〔名号〕 本姓、藤原。名、イナキ・稲置・稲木・エユキ。字、三徹。伊藤綾  
介・藤斐他と称す。〔経歴〕 尾張愛知中野村の人。みのや利介という薬種問屋の手代をしていたが、天明元年（一七八一）  
医者になった。国学では初め田中道磨の門人であったが、同八年、本居宣長に入門。僧海量と親交があった。」<sup>15</sup>と、稲置は  
道磨の弟子で、道磨没後、道磨の弟子達が宣長に入門したように宣長の弟子になった。平野廣臣は、『江戸文人辞典』によ  
ると、「安永二（一七七三）—嘉永六（一八五三）〇称春芳〇名方毅 江戸後期の国学者。尾張藩医平野春策の子として生  
まれ、文化十三年家を継ぎ、寄合医師となり、文政六年世子徳川斉温の侍医となる。以後天保十一年までの十七年間、常に  
江戸に滞在し、その職を勤める。広臣は、寛政十二年に本居宣長に入門、宣長没後は子の春庭に従学していたが、江戸滞在中は  
小林歌城に国学と和歌とを学んだ。（以下省略<sup>16</sup>）」と、寛政十二年（一八〇〇）年に宣長の弟子になった。時に、廣臣は一七  
歳で、稲置は四一歳であった。道磨書き入れの古活字本大和物語を伝えられた年は不明であるが、「吾醫術の学兄なる  
堀川主」稲置から、道磨の遺本を授かったのである。それに、和田以悦の『大和物語首書』や、「臣按」と自説を書き込んだ。  
天理本や架蔵本の古活字本大和物語には、学統の継承や、学統を越えての学問の広がりが見られるのである。

注

- (1) 天理図書館蔵田中道曆書き入れ古活字本大和物語。以下、便宜上該本を天理本とする。
- (2) 『大和物語の研究』古注本影印篇(私家版) 昭和48・8、八丁表。以下、便宜上該本を高橋本とする。
- (3) 「黒川文庫蔵『大和物語鈔』翻刻(上) 上野英子・山崎正伸、実践女子大学文学芸資料研究所別冊年報Ⅴ、平成13年3月20日。以下、便宜上該本を黒川本とする。
- (4) 古典文庫第三九四冊・高橋貞一編、昭和五四・七。以下、便宜上該本を古典文庫本とする。
- (5) 柳田忠則著『大和物語の研究』翰林書房、一九九四・二。以下、便宜上該本を日大本とする。
- (6) 風間書房・昭和42・8、巻第五18丁表・裏。
- (7) 『角川日本地名大辞典』CD-ROM版。角川書店、二〇〇二・二。
- (8) 『大日本史料』東京大学史料編纂所データベース検索。第六編之一、昭和57・10 九一五頁
- (9) 『俊頼髓脳』「天智天皇」『日本歌学大系』第一卷、風間書房、昭和47・8 一五六頁／『袖中抄』「雄略天皇」『日本歌学大系』別巻二、風間書房、昭和47・10 一八六頁／『奥義抄』「雄略天皇」『日本歌学大系』第一卷、風間書房、昭和47・8 三〇七頁／『和歌色葉』「雄略天皇」『日本歌学大系』第三卷、風間書房、昭和38・6 三〇七頁／『色葉和難集』「雄略天皇」『日本歌学大系』別巻一、風間書房、昭和47・10 四九八頁／『歌林良材集』「雄略天皇」『日本歌学大系』別巻七、風間書房、昭和61・10 四六〇頁。
- (10) 『賀茂眞淵全集』第一六卷、阿部俊子氏校訂、続群書類従完成会、昭和56・7
- (11) 『賀茂眞淵全集』第十六卷、続群書類従完成会、昭和56・7、五三九頁。
- (12) 林義雄・柴田一生「楳取魚彦年譜稿」『専修国文』一九八八・七、八頁。
- (13) 『稿本田中道曆伝』木耳社、昭和52・8、六七頁。
- (14) 『古言梯』再考期攷(下)『専修国文』三八号昭和61・1、一一三頁。
- (15) 『国書人名辞典』第四卷、岩波書店、一九九八・一一、三三六頁。
- (16) 『江戸文人辞典』東京堂出版、一九九六・九、三三〇頁。



| 年号 | 西暦 | 真淵   | 宣長 | 道麿 | 魚彦 | 春海 | 浜臣 | 躬玄 | 稲置 | 廣臣 |  |
|----|----|------|----|----|----|----|----|----|----|----|--|
| 宝暦 | 1  | 55   | 22 | 28 | 29 | 6  |    |    |    |    |  |
|    | 2  | 56   | 23 | 29 | 30 | 7  |    |    |    |    |  |
|    | 3  | 57   | 24 | 30 | 31 | 8  |    |    |    |    |  |
|    | 4  | 58   | 25 | 31 | 32 | 9  |    |    |    |    |  |
|    | 5  | 59   | 26 | 32 | 33 | 10 |    |    |    |    |  |
|    | 6  | 60   | 27 | 33 | 34 | 11 |    |    |    |    |  |
|    | 7  | 61   | 28 | 34 | 35 | 12 |    |    |    |    |  |
|    | 8  | 62   | 29 | 35 | 36 | 13 |    |    |    |    |  |
|    | 9  | 63   | 30 | 36 | 37 | 14 |    |    |    |    |  |
|    | 10 | 1760 | 64 | 31 | 37 | 15 |    |    | 1  |    |  |
|    | 11 | 1    | 65 | 32 | 38 | 16 |    |    | 2  |    |  |
|    | 12 | 2    | 66 | 33 | 39 | 17 |    |    | 3  |    |  |
|    | 13 | 3    | 67 | 34 | 40 | 18 |    | 1  | 4  |    |  |
| 明和 | 1  | 68   | 35 | 41 | 42 | 19 |    | 2  | 5  |    |  |
|    | 2  | 69   | 36 | 42 | 43 | 20 |    | 3  | 6  |    |  |
|    | 3  | 70   | 37 | 43 | 44 | 21 |    | 4  | 7  |    |  |
|    | 4  | 71   | 38 | 44 | 45 | 22 |    | 5  | 8  |    |  |
|    | 5  | 72   | 39 | 45 | 46 | 23 |    | 6  | 9  |    |  |
|    | 6  | 73   | 40 | 46 | 47 | 24 |    | 7  | 10 |    |  |
|    | 7  | 1770 | 41 | 47 | 48 | 25 |    | 8  | 11 |    |  |
|    | 8  | 1    | 42 | 48 | 49 | 26 |    | 9  | 12 |    |  |
|    | 安永 | 1    | 43 | 49 | 50 | 27 |    | 10 | 13 |    |  |
|    |    | 2    | 44 | 50 | 51 | 28 |    | 11 | 14 |    |  |
|    |    | 3    | 45 | 51 | 52 | 29 |    | 12 | 15 |    |  |
|    |    | 4    | 46 | 52 | 53 | 30 |    | 13 | 16 |    |  |
|    |    | 5    | 47 | 53 | 54 | 31 | 1  | 14 | 17 |    |  |

魚彦真淵に入門  
真淵大和物語会誌 堀川稲置生

加藤美樹歿 44 歳

6月以降上方旅行中鈴屋訪問 10/30 賀茂真淵没 73 歳

3月孝生庵万葉集会誌

6/4 大和物語校合終わる 「以県居本校合畢 魚彦」  
大和物語虚静抄 (木崎雅興 安永5年起稿)  
1/14 道麿魚彦<sup>5</sup>草庵孝生庵滞在<sup>5</sup>大和物語校合

| 年号 | 西暦   | 真淵   | 宣長   | 道磨 | 魚彦 | 春海 | 浜臣 | 射弦 | 稲置                               | 廣臣  |                |                      |
|----|------|------|------|----|----|----|----|----|----------------------------------|---|----------------|----------------------|
| 宝曆 | 6    | 7    | 48   | 54 | 55 | 32 | 2  | 15 | 18                               | 道磨宣長入門<br>6/10 加藤美樹没 57歳                                  |                |                      |
|    | 7    | 8    | 49   | 55 | 56 | 33 | 3  | 16 | 19                               |   |                |                      |
|    | 8    | 9    | 50   | 56 | 57 | 34 | 4  | 17 | 20                               |   |                |                      |
|    | 9    | 1780 | 51   | 57 | 58 | 35 | 5  | 18 | 21                               |   |                |                      |
|    | 天明   | 1    | 1781 | 52 | 58 | 59 | 36 | 6  | 19                               |   | 22             | 道磨宣長入門<br>渡辺直磨大和物語校合 |
|    |      | 2    | 2    | 53 | 59 | 60 | 37 | 7  | 20                               |   | 23             |                      |
|    |      | 3    | 3    | 54 | 60 | 61 | 38 | 8  | 21                               |   | 24             |                      |
|    | 4    | 4    | 55   | 61 |    | 39 | 9  | 22 | 25                               |   | 10月4日道磨没 平野廣臣生 |                      |
|    | 5    | 5    | 56   |    |    | 40 | 10 | 23 | 26                               |   |                |                      |
| 6  | 6    | 57   |      |    | 41 | 11 | 24 | 27 |                                  |   |                |                      |
| 7  | 7    | 58   |      |    | 42 | 12 | 25 | 28 |                                  |   |                |                      |
| 寛政 | 8    | 8    | 59   |    |    | 43 | 13 | 26 | 29                               | 直磨宣長入門<br>堀川稲置宣長入門<br>道磨門人川村正雄宣長入門<br>4/14 射弦松阪の鈴屋訪問宣長に面会 |                |                      |
|    | 1    | 1789 | 60   |    |    | 44 | 14 | 27 | 30                               |   |                |                      |
|    | 2    | 1790 | 61   |    |    | 45 | 15 | 28 | 31                               |   |                |                      |
|    | 3    | 1    | 62   |    |    | 46 | 16 | 29 | 32                               |   |                |                      |
|    | 4    | 2    | 63   |    |    | 47 | 17 | 30 | 33                               |   |                |                      |
|    | 5    | 3    | 64   |    |    | 48 | 18 | 31 | 34                               |   |                |                      |
|    | 6    | 4    | 65   |    |    | 49 | 19 | 32 | 35                               |   |                |                      |
|    | 7    | 5    | 66   |    |    | 50 | 20 | 33 | 36                               |   |                |                      |
| 8  | 6    | 67   |      |    | 51 | 21 | 34 | 37 | 1月13日渡辺直磨没<br>9月源射弦村田春海所持を書写し終わる |   |                |                      |
| 9  | 7    | 68   |      |    | 52 | 22 | 35 | 38 |                                  |   |                |                      |
| 10 | 8    | 69   |      |    | 53 | 23 | 36 | 39 |                                  |   |                |                      |
| 11 | 9    | 70   |      |    | 54 | 24 | 37 | 40 | 平野広臣 本居宣長に入門<br>本居宣長没            |   |                |                      |
| 12 | 1800 | 71   |      |    | 55 | 25 | 38 | 41 |                                  |   |                |                      |
| 享和 | 1801 | 72   |      |    | 56 | 26 | 39 | 42 |                                  |   |                |                      |